

平成 26 年 4 月 11 日

杉並区長 田中 良 殿

公益社団法人 日本天文学会
会長 櫻井 隆

杉並区立科学館の存続に関する要望書

公益社団法人・日本天文学会は、天文学の振興と普及を目的とした天文学研究者を中心とする会員数 3000 有余名の団体です。天文学は悠久な時間と広大な空間の中で展開する現象を扱います。天文学を通して私たちは宇宙の不思議を知るとともに、その中で人類や生命の位置について改めて思いを馳せることができます。天文学はこのようにして古くから重視され、広く人々の興味を引きつけてきました。

宇宙の探求には最新の科学技術が必要であり、これに携わる人材の育成は科学技術立国を謳う日本の発展にとって必須です。本学会が、年会で中学生・高校生が研究発表する「ジュニアセッション」の開催、天文教育および教材委員会の設置、講演会等への講師紹介など、天文教育を支援し普及活動に力を注いできたのもこのためです。貴区科学館においても、科学教育センター時代から 40 年以上開催され続けている天文講演会の講師には、私を含め、本学会に所属する研究者の多くが招聘されています。

貴区科学館は、地域住民と児童生徒のための科学教育普及施設の嚆矢として今日まで活動を続けられ、とりわけ、学校現場で扱いにくい理科実験授業プログラムの実施、プラネタリウムを活用した天文授業や先駆的なプラネタリウム番組の開発と実践で、全国にその名を知られる施設です。

しかしながら、その科学館が今般の貴区施設再編整備計画（案）の中で廃止の予定と聞き及び、ご再考をお願いいたしたく本要望書を差し上げました。

学校教育の中でも自然を扱う理科は、とりわけ実体験の重要性が指摘されていますが、その体験を児童生徒それぞれの知識体系にきちんと定着させるためには、経験豊かな専門家によるサポートが望ましいとして、現行の文部科学省・学習指導要領は、博物館や科学学習センターと学校との連携を推奨しています。学校における理科教育の充実はもちろんですが、科学館や移動教室でしか行えない実験や、プラネタリウムを活用した授業が空虚になることは、避けなくてはならないと考えます。

また、増加し続ける大人たちの学びへの欲求にきめ細かく応えるためにも、地域に根ざした科学教育普及施設の存在は極めて重要であり、高齢者の生きる糧ともなる知的好奇心を満たす身近な施設への需要が、卓上の ICT やデジタル技術だけに矮小化されてしまうことも、生涯学習部門の充実とは逆行すると思われる。

近年、科学館や博物館の営利優先、娯楽施設化が垣間見える中であって、杉並区立科学館は良い意味で保守的な義務教育支援を続けられる一方で、学究的な講座等のイベン

トも展開するなど、他と一線を画しており、もっと社会的に評価されるべき存在です。このような施設が老人介護施設との二者択一の対象とされたことは、文化都市の誉れ高い貴区の選択として違和感を覚えざるを得ません。先頃策定された「杉並区教育ビジョン2012推進計画」を紐解かせていただくと、生涯学習活動の拠点となる科学館の充実が高らかに盛り込まれております。

区民に示されたこのすばらしい中期計画を遵守され、杉並区ひいては日本における科学文化普及の核となる杉並区立科学館の存続とさらなる発展を、私ども日本天文学会は強く要望する次第です。